

# わたしの作品



【国府町高岡】  
川上 溪子さん



日本画は、何度も重ね塗りをする事ができて、そのたびに絵の雰囲気が変わるのでおもしろいです。実はこの作品も、最初は背景が秋の落ち葉をイメージして赤かったんですが、色の統一をすることによって、空気の透明感を出したいと思いい、冬の寒さや澄み切った空気の感じがでるまで何度も塗り直しました。

## 【日本画】市展賞

初冬



【岩美町蒲生】  
日下部 衆理さん



器を創るときには、どんな料理を盛るといいかなと考えたりしながら楽しんで取り組んでいます。

ひとつひとつの工程での手がけようが、そのまま正直に作品に表れてくるところが陶芸をやっていると楽しいところです。線はどう出るのかな、青は青でもどんな色になるのかなあと、窯出しの日には、朝からソワソワしてしまいます。

## 【工芸】市展賞

魚文象嵌皿

市民図書館の司書が調べます

# まちで見つけた「なんでだろう？」

道端に道路標識みたいなお地藏さま

が立っているの、なんでだろう？



これは、旅人が道に迷わないよう、進む方向や目的地、距離などを記したもので、「石標地藏」と呼ばれます。文字だけを石柱に刻んだものも多く見られ、「道標」とか「道しるべ」と総称されています。道路の交差点や分岐点（「分かれ辻」とか「追分」などと呼ばれます）に置かれることが多いようです。

現存する道標の多くは近世から近代にかけて作られたものです。参勤交代にともなう街道の整備や庶民の社寺参詣の隆盛につれて、普及したようです。お地藏さまなどが一緒に彫られているのは、神仏に旅の安全を祈ったもの

でしょう。

『因幡伯耆の道標』という本を書かれた加藤要治さんは、鳥取市内で三十二基の道標を確認されているそうです。

なかでも有名なものに丸山の道標があります。この道標は、文政十二年（一八二九年）に完成した『鳥府志』にも図入りで紹介されています。旧・国道九号線と市道（旧・県道鳥取砂丘線）が接続する丸山交差点の信号機のそばにあります。

石に浮き彫りにされたお地藏さまの左右には大きく、

右八まにみち（摩尼道）  
左八たしまは満道（但馬浜道）



丸山にある道標

と書かれ、中央下部には「是より三十四丁、たしま山ミち、まにへかけ連ハ、四丁のま王り」と、路程などが刻まれています。左側面には、

文化七庚午年六月日

と刻まれていますので、江戸時代後期の一八一〇年に建てられたことが分かります。ここから摩尼山麓まで、一町ごと（三十三体の一町地藏（町石））が建てられており、摩尼寺参りが盛んだったことをうかがわせます。また、野坂や正蓮寺、中大路には「いせ道」と記された江戸時代の道標も残っており、伊勢参りが浸透していたことも分かります。



鳥府志にある丸山の道標図